

## 教皇ヨハネ・パウロ二世のカテケージス：信仰と神シリーズ

### カテケージスと信仰について

#### 序論〔1〕

「信じて洗礼を受けるものは救われ、信じないものは滅ぼされる。」（マルコ16・16）

「聞かなかったものをどうして信じられよう。」（ローマ10・14）

私たちは聖霊降臨の日のエルサレムにいます。その日、高間に集まった使徒たちはみな「聖霊に満たされました。」（使徒行録2・4） 「突然、天から激しい風が吹いてくるような音が聞こえて」「火のような舌が現われた。」（同2・2、3） そしておのおのの上に止まった。それまで、閉じられてあった高間はこのとき開かれ、使徒たちは、諸国からやってきたユダヤ人巡礼者に会うため出ていきます。人々は「霊の言わせるままに」いろいろの国の言葉で話し始めた使徒たちを見て驚きます。（同2・4） 使徒たちの出身がガラヤであるを知っていたからです。

高間の近くに集う群衆に向い、ペトロが口を開きます。彼は「私の霊をすべての人の上に注ごう」と言うヨエルの預言を引用し、自分に耳を傾ける人々に、ナザレトのイエズスについて語りました。（同2・17参照） ペトロはさらに続けます。神がイエズスの救いの使命を「奇跡と不思議とするし」で承認されたこと、イエズスが死に渡され「悪人の手によってはりつけられ殺された」こと、そしてまた、神がキリストのみわざを復活によって決定的に承認されたことを。「神は死の束縛を解き、彼をよみがえらせました。」（同2・22～24参照） 聖ペトロはここで、復活を預言する詩篇15に言及しているようです。しかしなかでも、自分と他の使徒たちの目撃したことを思い起しています。「私たちはみなそのことの証人です」と。（同2・32） 「したがってイスラエルのすべての人は、あなたたちが十字架に付けたそのイエズスを神が主とし、キリストとされたことを、しかと知らねばなりません。」（同2・36）

#### 福音宣教と洗礼前の要理

ペンテコステとともに教会の時が始まります。この教会の時は同時に使徒たちの福音宣教の始まりでもあります。シモン・ペトロの説教は福音宣教の第一声というわけです。弟子たちはキリストから命令を受けました。あなたたちは全世界へ行って弟子をつくれと。

（マテオ28・19、マルコ16・15参照） そこで彼らは、祖国に敬意を表して、まずエルサレムで命令を果たしました。とは言え、そこには色々な言葉を話す人たちのいわば代表が居合わせたわけですから、自国のみを対象にした第一歩ではありません。また、御父のもとにお戻りになる贖い主の命令に従い彼らの福音宣教は、至聖なる三位一体の御名において授けられる洗礼への招きと結びついていました。だからこそ、兄弟たちよ、私たちは何をすべきなのか、と尋ねられた聖霊降臨の日、ペトロはこう答えたのです。「悔い改めな

さい。イエズス・キリストの御名によって洗礼を受けなさい」と。(使徒行録2・38)  
「その言葉を聞き入れた人々は洗礼を受けた。その日弟子に加えられたのは三千人くらいであった。」(同2・41)

こうして「使徒たちの教えること、兄弟的な一致、パンを裂くこと、祈りをすることに専念する」受洗者の集いとして、教会が誕生しました。教会の誕生は福音宣教の始めと時を同じくしたわけですが、それは同時にカテケージス(要理教育)の始まりであった、と言えるでしょう。これ以後、ペトロの話はイエズス・キリストに関する福音の布告、すなわち福音宣教であるのみならず、受洗の準備の指導、つまり洗礼前のカテケージスになりました。また、洗礼を受けた人々の最初の共同体が使徒たちの教えに専念したことは、教会が始めから組織的にカテケージスを行ったことを示しています。

### ニューシリーズ開始

私たちは絶えずこの始まりを思い起さなければなりません。「イエズス・キリストはきのうも今日も同じである」(ヘブライ13・8)ならば、あらゆる時代を通じて、教会の福音宣教とカテケージスも同じです。第二バチカン公会議の後、続く二度の司教会議で、現代世界における教会の使命として、福音宣教とカテケージスが扱われました。この仕事の実りが『福音宣教』と『要理教育に関する使徒的勧告』です。両文書は福音宣教とカテケージスとの密接なつながりを説明すると同時に、双方に固有な役割を指摘しています。

教会が今日も「使徒たちの教えることに専念しなければならない」とすれば、そのためにどうしても必要なのが「全ての人々に」(マルコ16・15)福音を告げることであり『要理教育に関する使徒的勧告』に則り、組織的にカテケージスをすることです。

聖霊降臨の日、シモン・ペトロはエルサレムで教会のカテケージスを始めました。その後継者・ローマの司教、キリストの代理者は、このペトロの仕事の続けなければなりません。そこで、組織的・全体的なカテケージスという枠内で、信仰と道德についての説明を始めようと思います。全キリスト者に、神が私たちが愛するあまり啓示し、実現させてくださったこと、さらに、教会が初代より今日にいたるまで続けてきた教理的な考察を提供するということです。この瞬間から私は、聖霊降臨の日のペトロのカテケージスを導いてくださった聖霊に、謙遜な心で恩寵をお願いします。

### 序論 [2]

「信じて洗礼を受けるものは救われ、信じないものは滅ぼされる。」(マルコ16・16)

「聞かなかったものをどうして信じられよう。」(ローマ10・14)

ふたたび新約聖書からの二つの文に触れ、カテケージスについての序論を続けます。聖霊降臨の日、シモン・ペトロは、十字架に付けられ聖霊の力によって復活したイエズスについての真理を告げて、三千人に信仰を興し、洗礼の準備をしました。ペトロのケリグマは、初期のカテケージス、とくに洗礼準備のカテケージスと考えられます。かくして「信じて洗礼を受けた人」(マルコ16・16参照)という言葉が確認されたわけです。しかし、神の御言葉を告げること、またそれを聞き入れることが信仰を得るための必須条件となり

ます。聖パウロが「聞かなかったものをどうして信じられよう」と言っているように。

### カテケージスとは

聖霊降臨の日にエルサレムで誕生した教会は「使徒たちの教えに専念しました。」これは、教える人と教えを受ける人との信仰における出会いを意味します。これこそ、ギリシャ語の「カテケオ」の意味なのです。語源的には「上から呼ぶ」「こだまを呼び起す」の意味から来ると考えられます。そこから「教える」という意味が出てきたのです。（教える人の声が生徒の声に響くとき、生徒の応答はいわば教える人の意識的なこだまであるということです。）この最後の説明はすこぶる重要です。カテケージスのような指導は、講義のように一方的に与えられるのではなく、質問と応答という風に対話でなければなりませんから。

こういう意味をもつカテケージスは、新約聖書、後に、教父たちの著作に数多く現われます。この言葉と一緒に現われるのに「カテクメノス」（洗礼志願者—教えを受ける人）があります。ここではもちろん、信仰の規範を学ぶ人という意味で使っています。「カテクメノス」とは、まず第一に「信じて洗礼を受ける」というキリストの指示に従って、洗礼の準備をする人を示しています。この精神で、聖アウグスティヌスは、カトリック求道者のことを「受洗予定者」「洗礼を目指して信仰とキリスト教的生き方に導き入れられる人」（カテキサンディブス・ルディブス）と呼んでいます。

### 信仰と洗礼

「カテクメノス」（洗礼志願者）という語（および間接的には「カテケージス」という言葉）の特定化（限定化）された意味は、初代信者の慣行と一致しています。聖霊降臨の日のエルサレムのように、初期には、信仰を得て洗礼を受けたのは成人でした。洗礼を受ける前に普通二、三年をかけて十分な準備をしていたのです。同じ事は現在も、とりわけ宣教国に見られ、洗礼志願期を設けて成人の洗礼の準備をしています。初代からこの準備は、信仰の真理とキリスト教的生き方の根本を教えるだけでなく、洗礼志願者を徐々に教会共同体に導き入れることを目的としています。カテケージスとは「入信」つまり洗礼の秘義への導入、さらに御聖体の秘跡を頂点とし中心とする秘跡的生活全体への導入をあらわしていたのです。

洗礼の儀式書をよく注意して読めば、洗礼は根本的で深い回心の効果的なしるしであることが容易に了解されます。洗礼を受ける人は使徒信経に従い信仰告白するだけでなく「悪魔とその栄華とそのわざ」を捨てます。それによって、受洗者は自らを生きる神に捧げるのです。洗礼は、人間の根本的な聖別です。聖別によって彼は、イエズス・キリストにおいて、また、秘跡のうちに働く聖霊とともに（「水と霊によって生まれる」ヨハネ3・5参照）御父に捧げられます。聖パウロは、洗礼の水につかることを、キリストの贖いのための死に浸され、キリストの復活に現れる超自然の生命に新たにあずかることの象徴と考えています。

こうしたことは、キリスト教の初期から、志願期、洗礼授与、御聖体への参加、ついで

秘跡全体への参加、という風に、カテケージスがいかに深い意味を有しかつ実践されていたかを教えてください。教会は絶えず「使徒たちの教えに専念」したわけですが、そのあらわれとしてのカテケージスは、自然の成り行きとして「志願期」を越えて行われるようになりました。それは、信者たちにキリストの秘義に関する一層深く確かな知識を与えるためであったのです。

### 要理教育者は啓示された真理すべてに忠実であるべき

私たちは、カテケージスが教会の働きの一つであることを思い起しました。その教会は、世界中に福音を広め、キリストの秘義をよりよく知ることによって秘跡の生活を深めようと努力しています。

教会は、全ての福音宣教と同様、カテケージスを通して人間のもっとも主要な疑問に返答するのだということを認識しています。ここで人間のもっとも主要な疑問とは、各人がすでに尋ねたことがあるか、あるいは、人生を歩むうちにいつかは尋ねることになる疑問のことです。人間はどこから来たのだろうか。どうして私は存在しているのか。神と私の、そして霊界と私の関係はどのようなものなのか。人生の目的を達成するためには、どのように振舞わなければならないのだろうか。なぜ私は苦しみと死を免れないのだろうか。そして、私の希望とは何だろうか。

このような疑問に、カテケージスは神の返答をもたらします。カテケージスとは、単に一個人の研究の産物ではなく、神の啓示を通して人類に伝えられた真理を理解させることなのです。ですから救いの真理を伝えるに当り、カテケージスは、人の心に生じる主要な疑問を明らかにし、人間のもっとも大きな期待を越える真理と生命の贈り物をもって、神が啓示の中でそれらの疑問にどのようにお答えになったかを示すことに関係しています。(コリント①2・6～9参照) その役割は、啓示の権威に基づいた確信を与えることです。

### 内容のもとのままの状態

それゆえカテケージスは、数々の疑問を熟考することによって疑念や混乱を引き起すのではなく、理知を啓発し、しっかりとした確信でそれを強めるのに役立ちます。確かにカテケージスは用意した答えて、人間の魂をより深く啓示の秘義へと導き入れますが、この秘義は、この世での生活の全ての影を追い払うことはできないとしても、心に光明を与えてくれます。私たちは何もかも理解できるというわけではありません。けれども主要な真理と生命の意味を指摘するのに十分なだけのことは理解できるのです。

一連の質疑応答というカトリック要理の形式は、しばしばカテケージスの根本的な構造を具体的、实际的に示していますが、それは人間の疑問と神の返答との出会い、と定義づけることができます。人間の疑問が神の啓示によって導かれ、すでに神の恩寵によって啓発されており、一方神の返答は人間の言語の限界と不完全さの中で作り出されているという事は確かです。けれどもそれは、本当に人間に固有の疑問であり、それらの疑問に対してカテケージスが神の光をもたらすのです。

このことは、問題の人間的な面に注意を向けているとは言っても、カテケージスが人間

の性格の熟考や、哲学・心理学・社会学的な研究、単に啓示の端を開くための努力だけに限られているのではないことを意味しています。カテケージスによって啓示された真理を人々に明細に説き、理解させなければなりません、真理の内容を減じたり、薄めたりすることはできません。カテケージスはその教えを受ける人々の能力に合わせてはしますが、神ご自身が人間に伝えたいと望まれた真理の一部を覆い隠す権利など、誰も持っていないのです。

## 信仰の問題

ここで、『要理教育に関する使徒的勧告』の中でカテケージスの内容のもとのままの状態に関して強調したことを思い起すのは価値があります。「実際、キリストの弟子となるものは、その信仰の服従が完全であるためには、『信仰のことば』を、そこなわれず、歪められず、弱められないで、本来の厳しさと力に満ちた完全なものとして受ける権利を持っている。それで、ある問題でメッセージの完全性を傷つけることは要理教育そのものを無価値にし、キリストと教会がそこから期待できる成果を危うくするのと同じである。」

このメッセージが難しく理解されにくく、受け入れられにくいことはよくわかっています。世界には福音の教えと相反する考えが多く流布しており、教会の名において教えられるもの全てに反対の態度をとり続ける人もいます。カテケージスに自らを捧げている人でもそのような抵抗を前にすると、キリストのメッセージの全ての真理、人生に対する全ての要求を明細に説くのではなく、譲歩して、もっと受け入れやすい幾つかの点だけを伝えよう、という誘惑に駆られるかもしれません。要理教育をする人が、自らの力量を越える教えを託されていることを思い出さなければならないのはその時です。受け取ったままにその教えを示すよう努力しなければなりません。カテケージスという務めを果たすにあたり、自らの信仰を伝えるのに必要な神の力を受けていること、また、忠実に教えを聞く人の中で聖霊が働き、教えを表現する聞き手の心に浸透させてくださることを特にしっかりと認識していなければなりません。

## カテケージスの役割

カテケージスの問題は信仰の問題です。教会の始めの頃、イエズスの数少ない弟子たちが、すべての人間に福音を宣教し、要理教育を与え得ると思った人がいるでしょうか。ところが、それが実現したのです。キリストのメッセージは、初めから多くの人の精神に浸透しました。当時、そして以後何世紀にも渡って恩寵が成し遂げたことを、恩寵は今日でも成し続けています。

ですからカテケージスは、信仰という完全な贈り物を子供たちや大人に伝えるのに、恩寵の力を頼りにしています。カテキスタは皆、キリストのメッセージ全体を伝える義務を持っており、キリスト御自身から、この使命を完全に遂行するための能力を受けているのです。

## 信仰とは、神の啓示に対する人間の応答

現在のカテケージスにとって、第一の、基本的な参照事項は、広く知られているキリスト教の信仰宣言です。これは「信経」とも呼ばれています。ギリシャ語のシンボロンは、承認の印として差し出される割られたものの半分（たとえば証印の半分のようなもの）という意味でした。切り離されていた部分を一つに合わせることによって、それを携帯している者の身元を証明したわけです。「信経」の次にあげる意味—身元の証明、信任の証、またシンボロンを証明として用いる約定あるいは契約という意味—は、ここから来ています。この意味から、発表され文書で証明された事柄の集積とか要約という意味へと移行したのはごく自然なことです。私たちの場合「信経」は主たる信仰の真理、教会が信じている事柄を集めたものです。組織だったカテケージスには教会が信じること、キリスト教信仰の内容に関する教えが含まれています。それゆえ「信経」はカテケージスの第一の、そして基本的な参照事項であるというのです。

古代の様々な信経の中でも権威のあるのは、もっとも起源が古くよく唱えられる「使徒信経」です。そこには十二使徒によって伝えられた、イエズス・キリストの教えの主要な真理が含まれています。もう一つ有名な古代の信経は「ニケア・コンスタンチノーブル」信経で、これも同じ使徒伝承の信仰の真理を含んでいます。それらは、ニケアとコンスタンチノーブルで開かれた、最初の二回の普遍公会議において正式に解説されたものです。教会の公会議の結果として信経が布告されるならわしは、今世紀において再び始められました。第二バチカン公会議の後、パウロ六世は「神の民のクレド」として知られている信仰宣言を布告されています。これには信仰の真理を総合したものが含まれていますが、特に、この公会議で示された内容、あるいは最近、疑問が起ってきた点を考慮に入れて書かれています。

信経は現在のカテケージスの主要な原典です。けれども遡ってみれば、信経とは、聖書と使徒継承から成り立っている「神のおことばという遺産」の総合物であり、その簡潔な要約にすぎません。ですから信仰宣言を通じて私たちも、何世紀にもわたり教会が聖霊の助けを受け、加えてきた解釈に導かれて、あの不変の「遺産」にまで遡ろうとするのです。

### 「私は信じます」の意味

先にあげた信経は、いずれも「私は信じます」という言葉で始まっています。実にそのいずれもが、教えだけでなく、宣言としても役立っているのです。この宣言の内容はキリスト教信仰の真理です。それらすべてが「私は信じます」というこの最初の言葉に根ざしています。そして、私たちがこの最初のカテケージスにおいて注目したいと思うのは、まさにこの「私は信じます」という表現なのです。

この表現は宗教的内容、特にキリスト教の内容と全く関係がなくても、ふだんの会話に使われています。「私はあなたを信じます」とは、私はあなたを信用します、私はあなたが事実を言っていることを確信しています、という意味です。「私はあなたの言っていることを信じます」とは、あなたの言葉の内容が客観的な事実と符合することを私は確信しています、という意味です。

「信じる」という言葉のこの普通の用法において、本質的な要素がいくつか明らかになっています。「信じる」とは話された内容、つまり相手（相手は一人ではないかもしれませんが）の言葉の内容を、その人（あるいはその人たち）の真実性ゆえに真実であり、事実符合するものとして受け入れ、認めるという意味です。この真実性が、ある特定の場合において、その人に特別の権威、「真理の権威」を与えます。従って、「私は信じます」と言うことによって、私たちは同時に二つのこと—その人とその人の述べる真理—に言及しているわけです。そして真理に言及するとは、その人が特別に信用できる人であると考えた上でのことなのです。

### 信仰とは啓示に対する人間の応答

「私は信じます」という言葉は、福音書と聖書全体によく出てきます。聖書による「信じる」とはどういう意味であるかを理解するために、新旧両約聖書の事項をすべて比較し分析することは、たいへん役に立つことだと思われまます。「信じる」と並んで「信仰」という名詞も、聖書全体の中心的表現の一つです。信仰のある種の「定義」さえ見受けられます。たとえば「信仰は希望するものの保証であり、見えないものの証拠である。」（ヘブライ11・1）

これらの聖書資料は、キリスト教二千年の歴史を通して教父や神学者たちによって研究され、説明され、深められてきました。これは、私たちが自由に使うことのできる膨大な聖書解釈や教理に関する文献によって証明されています。「信経」においても「信じること」「信仰」は、もっとも大切なポイントです。それはまた、神の啓示に答える最初の行為として、カテケーシスの出発点でもあるのです。

ここではただ一つの出典に限っていますが、それでもこの文献は、他のすべての文献を含んでいます。それは第二バチカン公会議の『神の啓示に関する教義憲章』です。そこには次のように書かれています。

「神は、その愛と英知によって、自分を啓示し、また、託身のみことばなるキリストにより、聖霊において、人々を父に近づかせ、神性にあずからせる（エフェゾ2・18、ペトロ②1・4参照）み旨の秘義（エフェゾ1・9参照）を明らかにしようとした。」（2番）

「啓示する神に対しては『信仰の服従』（ローマ16・26、1・5、コリント②10・5～6参照）を示す必要がある。これによって人間は『啓示する神に対して、知性と意志の全き奉獻』（第一バチカン公会議『カトリック信仰に関する教義憲章』）をなし、また神から与えられた啓示に自発的に同意して、自由におのれをまったく神にゆだねるのである。」（5番）

公会議の布告したこれらの文献には「『信じる』とはどういう意味か」という疑問に対する答が含まれています。その説明は簡潔ですが、たいへん豊富な内容を含んでいるのです。したがって私たちは、いわゆる学術上の定義に匹敵する重要性を持っている公会議によるこの説明に、もっと深く入りこまなければならないでしょう。

まず、一つのことを明らかになってきます。それは、信者の「私は信じます」と、「啓示」と呼ばれる神ご自身のイニシアティヴとの間に、語源的、発生的つながりがあるとい

うことです。

「信経」（信仰）に関するカテケージスは、神の啓示に関するカテケージスとともになしとげられなければなりません。論理的にも時間的にも啓示が信仰に先行します。信仰は、啓示の限定を受けています。信仰とは、神の啓示に対する人間の応答なのです。

ですから、この応答は可能であり、また応答しなければならないと考えられます。なぜなら神は信頼できる御方だからです。神ほど信頼できる御方はいません。神ほど真実の権威を持っている御方はおいでになりません。神への信仰ほど、人間のよく使う「私は信じます」「私はあなたを信じます」という言葉が概念的にも語源的にもぴったりと当てはまる例は他にはありません。

### 人間理性の自然の光によって神を知ることができる

これまで、信仰は啓示によって条件付けられること、そして、信仰の前に啓示があることを学びました。今度は『神の啓示に関する教義憲章』を参考にして、啓示とは何かを明らかにしていきましょう。その前に、信仰についてもう少し考えましょう。ご自身を示すことを望まれた知恵深く良き神に答えて「信じます」というのはどういうことなのでしょう。

「信じます」という前から、人は理性の働きを使ってすでに神についての何らかの考えをもっています。神の啓示についての憲章は次の言葉で説明しています。「万物の起因であり目的である神は、人間の理性の自然的光によって、被造物を通して確かに認識される。」（6番）

第二バチカン公会議は、第一バチカン公会議で十分明らかにされたことを想起させますが、これは新旧両約聖書に基づく教会の聖伝に一致した考えです。

神の存在は、被造物を通して知りうるということについて述べる古典的テキストは、聖パウロのローマ人への手紙にあります。「神について知りうることは、彼らにとっても明らかである。神がそれを彼らに表わされたからである。神の不見性、すなわちその永遠の力と神性とは、世の創造のとき以来、そのみわざについて考える人にとって見えるものだからである。したがって、彼らは言いのがれができない。」（ローマ1・19～21）この時パウロの念頭にあったのは、「不正によって真理を妨げる人々」のことでした。（同1・18）この人々は、その罪によって誰もが知りうるはずの神に光栄を帰さなかったのです。人は、神の存在だけでなく、神の本質、完全性、属性までも、ある程度知ることができます。見えざる神は、お造りになったものを通して何らかの形で知られうるようになさったのです。

旧約聖書の知恵の書でも、聖パウロが語ったように被造物を通して神の存在を知りうることははっきりと述べられています。

「何はさておき、神を知らない人はだれでも、心底からの愚か者だ。彼らは目に見えるよいものを通して『存在するもの』を知ろうとせず、業に目をとめてもそれをつくった方を認めない。

彼らが、この世を支える神々として認めたのは、火とか、風とか、速やかな空気とか、天界とか、波濤とか、天からの光とかだった。それらのものの美に心を奪われてそれを



神々だと思ったなら、それらの主が、はるかにそれにまさるものだと知らねばならない。それをつくったのは、美の創造主ご自身だからである。

また、それらの力と働きに感嘆したのなら、それをつくった方が、いかに勢力あるかを推しはからねばならない。

被造物の偉大さと美は、そのつくり主を、類比によって推しはからせる。

だが、彼らには大して責任がないかもしれぬ。彼らが迷ったのは、おそらく神を求め、神を見いだそうとしたからなのだ。

みわざを調べて、神を見出そうと努力したが、彼らは、目に見えるものにとりこなつた。それが実に美しかったので。だが、彼らを許すわけにはいかぬ。宇宙を探れるほどの知識があったのなら、なぜもっと早く、それらのものの主を見いださなかったのか。」  
(知恵13・1～9)

### 第一原理がないと何も説明がつかない

この章句に見られる主な考えは聖パウロの書簡にも見られます。(ローマ1・18～21) 神は被造物を通して知られる。目に見える世界は、見えない神の存在を確認するための出発点なのです。知恵の書の章句はより一層重みを増してきます。靈感を受けた筆者は、あの時代の被造物に光栄を帰する異教徒たちと、論議を交わしています。また、旧約の聖書記者は、私たちの時代はもちろん、どの時代にも通用する省察と判断の原理となるものを示してくれています。彼は、目に見える世界を知るために払われる多大な努力について語っています。また「神を求め、見いだしたいと望む」人々のことにもふれています。そして、人間は、この世界のことを熟考するだけの知恵もっているのに、なぜ、この世界の主を知ることができないのかと問いかけるのです。知恵の書の筆者も、その後にくる聖パウロも、この点を咎めています。しかし、この点については、しばらくおいておくことにしましょう。

いまはとりあえず先ほどの問題、天地万物(大宇宙と小宇宙)について、またその法則や現象、構造やエネルギーについての知識をいくら増やしても、その方なしにはこの世を説明することのできない第一原理である神を、なぜ知り得ないのか考えてみましょう。現在、かなりの人のつまづきのもとになっている問題を検討しなければなりません。けれども、嬉しいことに今日でも、科学的知識によって、信仰に励まされ、あるいは、少なくとも神秘の前に脱帽する誠実な学者が数多くいることも心に留めておきましょう。

### 人間の知性

聖伝は、新旧両約聖書に基づくものです。この聖伝に則って19世紀の第一バチカン公会議で教会は、被造物を通して神を知り得る力が、人の知性に与えられているという教義を思い出させ確認してくれています。また、今世紀の第二バチカン公会議でも、神の啓示に関する教義憲章でこの教義を繰り返し唱えています。これは実に重要なことです。

神の啓示は、確かに、人が「信じる」時の信仰の基礎となります。しかし同時に、神の啓示によって書かれた聖書の句を読めば、人が理性の力だけでも神を知り得ることがわか

ります。たとえ間接的で時間がかかるとしても、とにかく人は神について何か悟ることができるのです。ですから「信じる」と同時に「何か知っている」と言うことができるのです。この神に関する知性の認識は、自然神学という学問の中で体系的に扱われています。自然神学は哲学の一分野であり、存在するものについての哲学・形而上学から生じました。この学問のねらいは、第一原因であり宇宙の最終目的である神を知ることです。

これらの問題は、それに関する様々な哲学的論議と同様、信仰の真理の教義を少し垣間見ただけで分かるわけではありませんし、また、人の心を神の探索に向かわせる道、いわゆるトマス・アクィナスの五つの道を詳しく検討するわけにもいきません。ここでは、キリスト教ではもともと理性の力だけでも神を知り得るのだとしていることを、心に留めておくだけで十分でしょう。ですから、信仰に基づく神についての考察は全て理性的で知的なものだと教会は語るのです。無神論でさえ、神について語っているのと同じことです。無神論は神を否定することですが、そのためには、否定するものの存在をまず知っていなければならないからです。

信仰によって得た知識は、理性だけで得た知識とは確かに異なります。しかし、人間の側に、神に関する何らかの真理を知る能力が始めからなかったとしたら、神がご自身をいくら人間に示そうとしてもできなかったことでしょう。ですから、人の知性の特性である「知る」という行為と並んで、それに加えてキリスト信者の持つ「信じる」という行為がくるのです。さらに、この信仰によって、信じる者は、たとえ分かりにくいとしても、ご自身を表される神の奥深い生命の神秘を知る鍵を握っているのです。

### 神の啓示の伝わり方

私たちの確信の上、自由に、信仰によって受け入れるように神が啓示なさった事柄は、どこに見つけることができるでしょうか。

第二バチカン公会議は次のように教えています。「聖伝と新旧両約聖書は、いわば鏡のようなもので、地上を旅する教会は『神をあるがままに、面と面とを合わせて相見るときまで』（ヨハネ①3・2参照）、すべてのものを賜りながら、その鏡の中に神を見るのである。」（7番）

この説明で公会議は、信者一人ひとりにとって大切な神の啓示の伝達についての教えを要約しています。永遠に面と面とを合わせて神を見るために歩む道、その道を整えてくれる「クレド（使徒信経）」は、イエズス・キリストにおいて頂点に達し完成された啓示、つまり神の自己啓示を、いかに忠実かつ正確に伝えるかにかかっています。

キリスト御自身は「救いに関するあらゆる真理と道徳の源として、すべての人にのべるよう、またかれらに神の賜を与えるよう、使徒たちに命じた。」（同）使徒たちは任せられた使命をまず自分の口で宣布したが、同時に彼らのうちのある者は「聖霊の靈感により救いの知らせを書き物にした。」マルコとルカも同じことをしました。

啓示はこのようにして初代の信者に伝えられました。「使徒たちは、生きた完全な福音が常に教会に保存されるよう司教たちを後継者として残し、彼らに自分たちの教導職を与えた。」（同）

公会議の教えによると、聖伝と聖書とは、教会内における神の啓示の伝達において互いに補い合い、互いに完成し合っています。聖伝と聖書から、キリストの新しい世代の弟子や証人たちは栄養を得ます。「実際、使徒たちによる聖伝は、神の民が聖なる生活を営み、かつ信仰を強めるのに役立つすべてのものを含んでいる」（8番）からです。

「この使徒たちから出る聖伝は、教会において聖霊の援助によって進歩する。実際、伝えられた事物や言葉に関しては、それを心の中で思い巡らす信者たちの黙想と研究によっても、あるいは体験する霊的な実在についての深い理解によっても、あるいはまた、司教職の継承とともに真理の確かな賜（カリスマ）を受けた人たちの説教などによっても、その理解が深くなる。要するに教会は、自分に神の言葉が成就するまで、時代の推移に伴って絶えず、完全な神的真理を目指して進むのである。」（同）

神の啓示の充満に向う教会は絶えず、元々の唯一の遺産に頼っています。すなわち「同一の神的起源を持ち、ある程度一体をなし、同一の目的に向かう」聖伝と聖書に依存しているのです。

### 神のおことばそのもの

この点については公会議の言葉を引用してはっきりさせておきましょう。「教会は聖書だけから啓示されたすべてのことについて自分の確信を得るのではない。」（9番）聖書は「聖霊の靈感によって書かれたものとしての神のことばである。そして聖伝は、主キリストと聖霊から使徒たちに託された神のことばを余すところなく後継者に伝え、後継者たちは、真理の霊の導きのもとに、説教によってそれを忠実に保ち、説明し、普及するようになるものである。」（同）「またこの聖伝によって、聖書の諸書の完全な正典が教会に知られ、その中で聖書そのものがより深く理解され、絶えず活力にあふれたものとされる。」（8番）

「聖伝と聖書とは、教会に託された神の言葉の一つの聖なる委託物を形作っている。この委託物によって、聖なる民全体が、その牧者を中心にして、使徒たちの教えを忠実に保つ。」（同10番）従って、聖書と聖伝は信仰と愛の心で受け入れられ、讃えられねばなりません。

### 聖書解釈と教導職

ここで書き記された、あるいは聖伝によって伝えられてきた神の言葉の解釈の問題が出ます。この解釈の仕事は「キリストの名で権威を行使する教会の生きた教導職だけに任せられている。」「この教導職は神の言葉の上にあるのではなく、むしろ、これに奉仕し、伝えられたことだけを教えるのである。すなわち、神の命令と聖霊の援助によって、神の言葉を敬虔に聞き、堅く保存し、忠実に説明し、そして信ずべき神の啓示として宣言すすべてのことを、信仰のこの唯一の委託物から汲み取るのである。」（同）

### キリスト教的に信じるとは、教会が教える啓示を受け入れること

ここに信仰のもう一つの特徴が出ています。すなわち、キリスト教的に信じるとは、教

会が教えるままの神の啓示を受け入れることなのです。第二バチカン公会議の『教会憲章』には次の点も明らかにされています。「信者の総体は信仰において誤ることができない。この特性は、『司教をはじめとしてすべての信徒を含む』信者の総体が信仰と道徳の事柄について全面的に賛同するとき、神の民全体の超自然的な信仰の感覚を通してあらわれる。事実、真理の霊によって起され、支えられているこの信仰の感覚 *Sensus fidei* によって、また聖なる教導職—これに従うものはもはや人間の言葉ではなく真に神の言葉を受ける—の指導の下に、神の民はひとたび聖徒たちに伝えられた信仰を傷つけることなく守り、正しい判断によってその信仰を一層深く掘り下げ、それを生活のうちにより完全に具体化していくのである。」（『教会憲章』12番）

聖書と聖伝と教会の教導職、それに神の民全体の超自然的信仰の感覚が一緒になって、神の啓示を伝達するための生ける道筋となります。「このようにして、かつて幾度か語った神は、不断に愛する御子の花嫁と語り、福音の生きた声は聖霊によって教会に、また教会によって世界に響き渡り、そして聖霊は、信ずるものをすべての真理に導き、彼らの中にキリストの言葉を豊かに宿らせるのである。」キリスト教の信仰とは、聖霊に導かれて、意識的かつ自由に、完全な真理に至ることなのです。

再び「信じる」とはどういうことかを取り上げましょう。

キリスト教的に信ずるとは、聖霊の導きを受けて神の啓示された真理すべてに向うことです。それは、キリストの福音の言葉に心を開いている信ずる者の共同体となることと言えます。この二つはどの世代にあっても可能な事柄です。聖伝と聖書に含まれている神の啓示すべてを生き生きと伝達することが、教会の中で続けられているからです。このような伝達が可能であるのは、神の民の信仰感覚との調和を見つめつつ続ける、教導職の働きのおかげです。

## 聖書の正しい解釈

このカトリックの「クレド」（信仰宣言）とその源泉との関係をはっきりさせるために、もう一つ大切なことがあります。それは聖書の靈感についての教えと聖書の正しい解釈のことです。

「とうとき母なる教会は、旧約および新約の全部の書をそのすべての部分を含めて使徒的信仰に基づき、聖なるもの、正典であるとしている。なぜならばそれらの書は、聖霊の靈感によって書かれ、神を作者として教会に伝えられているからである。」目に見えず超越的存在である神は「聖書の作成にあたって、固有の能力と素質を持った人間を選んで、これを使用した。それは、彼らが、神が望むことをすべて、そしてそれだけを、真の作者として書くためである。」（『啓示憲章』11番）

このような起源を認めた上は「聖書は、神がわれわれの救いのために書かれることを望んだ真理を固く、忠実に、誤りなく教えるものと言わなければならない。」（同）聖パウロのティモテオへの書簡もこの点を保証しています。「聖書はすべて、神の靈感によるもので、人を教え、説得し、矯正し、義に導くために有益なものである。それは神の人が完全となり、すべてのよきわざのために準備されたものとなるためである。」（ティモテ

オ②3・16～17)

憲章は、聖ヨハネ・クリゾストムスの言葉を引用しつつ、神のへりくだりについて語っています。「人間に対する永遠の英知が、くすしくも己を低くして人間に近づかれた。それは『われわれが、神の言いやさしさと、神がいかにわれわれの本性についておもんばかり、意を用いて、自らの話を加減したということを経験するためである。』 実際、かつて永遠の父のみことばが、人間の弱い肉をつけて、人々に似たものとなったように、人間の用語で表わされた神の言葉は、人間の話に似たものとなっている。」（『啓示憲章』13番）

### 解釈のための規則

聖書の「靈感」についての真理から当然のこととして、聖書解釈の規則が導き出されます。憲章にはこの点についてごく簡略に説明しています。

まず第一に次の点をあげるべきでしょう。「神は、聖書においては、人間を使って人間の様式に従って語ったのであるから、聖書解釈者は、神が何をわれわれに知らせようとしたかをよく知るために、聖書作者が実際に何を意味しようとしたか、また彼らの言葉を通して何を示すのが神意であったかを入念に研究する必要がある。」（同12）

この目的を達するため、二番目には「文学類型」を考察しなければなりません。「実際、種々の方式での歴史的な、あるいは預言的な、あるいは詩的な書において、真理は違った方法で語られかつ表現されている。」（同） 作者が実際に何を言おうとしたかは、文学類型によって変るものですから、特定の時代の特定の文化の背景をよく知らなければならぬのです。

ここで、正しい聖書解釈の第三番目のポイントがあらわれます。「聖書作者がその著書において言おうとしたことを正しく理解するには、聖書作者の時代に一般に行われていたその土地の通常のものと考え方、言い方、話し方、ならびに当時の社会関係によく用いられていた、そのような様式に留意しなければならない。」（同）

### 聖書全体の内容と一体性

歴史文学的なものを正しく解釈するために以上のような詳しい指示があるわけですから、聖書の靈感についての教えという前提との関係をしっかり把握していなければなりません。「聖書はそれが書かれたのと同じ霊の光の下に読まれ、解釈されねばならない。」（同） 教会の生きた聖伝全体と信仰の類比（信仰の諸要素の間に見られる調和）とは、個々の信仰の要素が相互に一体性を保ち、かつ啓示全体および、啓示に含まれている救いの実現との関係に調和がとれているということです。

聖書解釈者の仕事とは、適切な方法を保ち、先に述べた諸原則を守りつつ「聖書の意味を深く理解し、説明するために努力し、いわば、準備的な研究によって、教会の判断が熟するようにすること」です。（同） 教会は神の言葉を守り、かつ解釈する命令と使命を受けているのですから、「聖書解釈に関するすべての事は、最終的に、教会の判断の下におかれている」のです。（同）

この点は、聖書解釈（と神学）および教会の教導職との間の相互関係をはっきりさせるために決定的に重要です。この原則は、先に述べた啓示の伝達にも関わるすこぶる大切なものです。従って、この点を確認しておく必要があるでしょう。すなわち教導職は神学者と聖書学者の仕事を活用するが、同時に彼らの研究成果を監視する役目を持っていると。実に教導職は神の啓示に含まれているすべての真理を守るべく召されています。

キリスト教的に信じるとは、キリスト御自身の制定になる制度を通して教会に与えられる真理の保証を利用して、この真理を受け入れることです。これはすべての信者について言えることですが、神学者や聖書学者についても大差なくあてはまる点です。神はご自分を啓示してくださただけではなく、その啓示を教会に手渡し、啓示が忠実に保護され、解釈され、説明されるようにしてくださったのです。

（以上、カテケージスと信仰について）

## 神について

### 神は霊である

「神は霊である。」主イエズス・キリストがこのように宣言されたのは、シカルのヤコブの井戸の傍でサマリアの婦人とお話しになったときでした。

この言葉の光のもとで「私は神を信じます」という信仰宣言の最初の真理について話を続けましょう。第一バチカン公会議の憲章『デイ・フィリウス』の教えを参照していきます。第1章は「万物の創造主である神」についてです。自らをお示しになったこの神は、「預言者を通じて語られ、そして最後に…御子を通じて語られました。」（ヘブライ1・1）「この世の創造主であられるかたはお造りになったこの世とは本質的に異なる御方です。」神は永遠であり、一方すべて造られたものは事情次第で変化するもの、時の支配を受けるものです。

私たちが信じる神は永遠であるゆえ、神は「生命の充満」であって、目に見える世界に生きるすべてのものとは区別されるべき御方です。霊、純粋な霊である神について「生命」と言う時、この語は最高の意味で理解されなくてはなりません。第一バチカン公会議が教えるように、神は無限であって目には見えないのです。造られた見えるものの世界の基準や、人間の生命の行程を計る時間といった基準で計れるようなものは、何一つ、神の中に見つけることができません。神は物質を超えたものであり、完全に「非物質的」であるからです。しかしながら、聖なる存在が霊であるとは、物質でないというほかはないような消極的な方法に限られているというわけではありません。実際、ナザレトのイエズスがサマリアの婦人に「神は霊である」とお答えになった時のように、肯定的な方法によって神という存在は霊であることを知るようになるのです。

第一バチカン公会議の文書を参照すると、神についての教義が確認できます。神について教会が信じ宣言している根本的な主張とは、「神は唯一無類、全く単一で不変の霊的実体であり」「知恵と意志とすべての完全性において無限の御方である」という二点です。

神は霊であるという教えは啓示によって伝えられましたが、この文書の中では、存在という専門語を使って記されています。すなわち「霊的実体」という表現。「実体」と言う語は存在の哲学の用語であり、この句によって公会議文書は、神について次のように述べようとしているのです。神はその本質によって全被造物の世界とは区別され、自立する存在であるばかりでなく、自立する霊でもある、と。神という存在は、それ自身の本質から絶対的に霊的なものなのです。

霊であるとは、知恵と自由意志を備えていることを表します。神は無限の叡知（知性）であり、意志であり、自由です。それは神がすべての完全性において限らない御者であるのと同様です。

神についてのこうした数々の真理は、聖書や聖伝に見出される啓示によって実際に幾度も確証されています。神という存在の限りなく完全な知性を強調している箇所を聖書から引用しましょう。神の限りなく完全無欠な自由と意志については後に述べます。

まず第一に思い出されるのは、聖パウロのローマ人への手紙の中の感嘆の叫びです。「ああ、神の富と上智と知識の深さよ、その裁きは計り知れず、その道はきわめがたい。主の思いを知ったものがあるか。」（ローマ11・33）

この使徒の言葉は、旧約聖書の知恵の書の教えをこだまさせています。「（神の）知恵は計りがたい」と詩篇は宣言しています。（詩篇46・5） 神の尊厳は、その知恵と一体です。「主は、偉大なもの、大いに称えられるべきもの、その偉大さは、計り知れない。」（同44・3） 「その上には何一つ切りとることも付け加えることもできない。主の不思議を見つける方法はない。人が知りつくしたと思う時、そこが始まりであり、人がそれをし終えたときには、何もわからなくなる。」そこで賢人は、「主はそのみわざのすべてを超えるものである」ということができ、そして「主はすべてだ」と結論に至るのです。（シラ18・5～7、43・28、27）

知恵の書の著者たちが神について三人称の「彼」を用いているのに対し、預言者イザヤは一人称の「私」を使って語っています。イザヤは自分に靈感を与える神ご自身に語らせるのです。「天が地よりも高いように、そのように私の道は、あなたたちの道より高く、私の考えは、あなたたちの考えよりすぐれている」（イザヤ55・9）と。

神の「御考え」と神の「知識と知恵」という表現の中に、神の存在は限りなく完全無欠であることが示されています。その限りない知恵により、神以外の存在するものすべてに超えて、神は崇高です。いかなる被造物といえども、とりわけいかなる人間であろうと、神のこの完全性を否定することはできません。「だが人間よ、神に口答えするあなたは何者か。造られた者が造った者に向って『どうしてあなたは私をこのように造ったのか』と言えようか。つぼ造りは土くれの主人ではないのか」と聖パウロは問いかけています。（ローマ9・20） このような考えと表現法は、旧約聖書から引き継がれました。同様な問いと答えをイザヤの書とヨブの書に見出すことができます。（イザヤ29・15、49・9～11参照、ヨブ2・9～10、1・21参照） 第二法の書は「われらの神に光栄あらしめよ。主はいわお。そのみわざは完全。その道はすべて正しい。主は真の神であり、いささかの不義もない、正と義そのものである」と宣言しています。（第二法32・3～4） 神の限りなき完全性を賛美するとは、神の知恵だけでなく、神の正義と誠実さ、つまり神の倫理的な完全性を賛美し、告白することにもなるわけです。

山上の説教でイエズス・キリストは「天の父が完全であるようにあなたたちも完全な者になれ」と勧告なさいました。（マテオ5・48） この呼びかけは、神は完全である、神は「限りなく完全である」と信仰告白するよう招くものです。（『カトリック教会文書資料集』 DS 3001）

神が限りなく完全であるとは、イエズス・キリストの教えの中に絶えず出てくる事柄です。サマリアの婦人に、「神は霊である…真の礼拝者が霊と真理をもって御父を拝む時が来る」と仰せになったイエズスは、「よい先生」と問いかけた若者にお答えになる時には「なぜ私を『よい』と言うのか。神御一人のほかよいものはない」と言い、意味深長な表現で御自分をお示しになりました。（ヨハネ4・23～24、マルコ10・17～18）

神のみわざ、神は無限の善性を所有しておられる。神はあらゆる善の充満です。そして、



神が存在の充満そのものであるごとく、すべての善の充満によって神は善そのものであられます。神が善の充満であるとは、神の意志の限りなく完全性に呼応するものです。それはちょうど、限りなく完全な神の知性と理知が真理の絶対的な充満に呼応するのと同じです。神の無限の善性は、神の知性、神の存在と同じなのです。神は無限に完全な霊であるゆえ、霊によって神を知る人々は神の真の崇拜者になります。彼らは、霊と真理の中に神を崇拜する。

無限の真理の充満であり、無限の善であられる神は「自ら広がり行くもの」です。（『神学大全』 I,q.5,a.4,ad.2） これによってもまた、神はご自身を啓示なさっています。啓示なさるのは、善にして真理である御方です。

御自分を啓示されたこの神は、得も言われぬ崇高な方法でご自身を与えるために、御自らを伝えることをお望みになりました。これこそ、契約の神、恩寵の神なのです。

## 全能の神

「われは天地の創造主、全能の父なる天主を信じ…」

御自身を示された神、私たちが信じる神は、限りなく完全な霊です。限りなく完全な霊であられるので、神は真理と善とに完全に満ち満ちておられ、ご自身を与えることをお望みになりました。実に、善とは自ら広がるものです。（『神学大全』 I,q.5,a.4,ad.2）

神は無限の善である。この真理は、神が天地の創造主、見えるもの見えざるものすべての創造主であると述べる使徒信経の中で、ある意味では表現されています。創造に関する真理については後ほど取り上げることにして、神における創造の秘義に該当するものを今、啓示の光の下で一通り見るのもいいでしょう。

教会は、神は全能であると宣言します（「われは全能の父なる天主を信ず」）が、神は限りなく完全な霊であるゆえ、全知でもあるわけです。つまり、神の知識はあらゆるものを見通します。

この全能にして全知の神は、創造の力、すなわち何も存在していない状態から存在を、無から有を生じさせる力を持っています。「主にとって不可能なことがあるか」と創世の書18章14節の述べる通りです。

「あなたの偉大な権勢を示すものは、いつもあなたの御手の中にある。あなたの腕の力に抵抗できるものがあるだろうか。」これは知恵の書のことばです。（知恵11・21） また、エステルの書では「主よ、全世界の主である主よ、あなたのみいつのもとにすべては服従します。あなたに逆らえるものは、一人としてありません」（エステル4・17b）という言葉で同じ信仰を宣言しています。そしてお告げのとき、大天使ガブリエルは「神にはおできにならないことはありません」とナザレトのマリアに語るのです。

預言者たちの口を通してご自身をお示しになる神は全能です。この真理は「神が…『あれ』とおおせられた」（創世1・3）という創世の書の最初の言葉から始まって、啓示全体を貫くものです。創造のみわざは「主が言えば、ものは存在し」と、神の言葉の力強さで明示されています。（詩篇32・9） 無からあらゆるものを、存在しない状態から存在を造ることによって、神は自ら広がる限りなき全の充満であるご自身を啓示なさいました。「存

在する」神、自立的な存在である御者、限りなく完全な存在は、見えるものと見えないものの宇宙、すなわち、被造物をご自分の外に生じさせることによって、ある確かな意味でご自身「存在そのものである」事をお示しになるのです。物を造ることによって神は宇宙の歴史をお始めになり、人間を男と女とに造ることによって人類の歴史をお始めになりました。創造主として、神は歴史の主であるわけです。「働きはいろいろあるが、すべての人にすべてを行われる神は同じである。」（コリント①12・6）

創造主、従って世界と人間の歴史の主としてご自身を啓示なさる神は、全能の神であり生きる神です。第一バチカン公会議によれば「教会はまことの生きた神が唯一であることを、天地の創造主であり、全能であることを、信じ宣言する。」（『カトリック教会文書資料集』DS 3001）この神は、限りなく完全な全知の霊であり、創造という行為そのものに関してさえも、絶対的に自由であり、全権を持っておられます。もし神が、その創造された一切のものの主であるならば、まず第一に創造のみわざに働いたご自分の意志の主であるわけです。神は創造しようとお望みになったゆえ創造なさった、神は創造なさいましたが、それは創造が神の無限の知性に従っているからです。お造りになるとき、神は計り知れない自由に満ち満ちて、永遠の愛に動かされて行動なさいます。

第一バチカン公会議の文書『デイ・フィリウス』をすでに幾度も引用してきました。ここでは、創造のみわざとそのすべての行為が神の絶対的な自由な行いであることを強調しています。神は「自身において、自身について、至福な」者である。自身において、自身について、神は善性と至福の完全な充満です。世界を存在させるに当り、神はご自分の善性をより完全にし、整えるためにではなく、もっぱら色々な存在の善を目に見えない被造物と目に見える被造物の世界に与えるために、そうなさいました。それは、唯一無類、無限で永遠の善、すなわち、まさに神の存在そのものであるこの善を、被造物が多種多様な形で分有することです。

かくして、創造のみわざにおいてまったく自由に支配なさる神は、造られた宇宙とは根本的に独立した存在であるわけです。これは、神が被造物に対して無関心であるという意味では決してありません。むしろ、永遠の上智、愛と全能の神として被造物を導いてくださることを意味するものといえましょう。

聖書には、神がこのみわざを単独でなさった旨述べています。預言者イザヤは「私はすべてを造った主である。私だけが天をひろげ、地をのべた。私と共にいた者があるか」と言っています。（イザヤ44・24）神がお一人でなさった創造のみわざには、神の卓越した自由と父としての全能が際立っています。

「彼は地を形どって、つくりあげた神である。彼はそれを固められた、それを、混沌のために造られたのではなく、人が住むようにと造られた。」（同45・18）

「預言者を通じて語られたが、この世の終わりの日々には、その子を通じて」（ヘブライ1・1～2）ご自分を啓示なさる神の言葉に照らされて、教会は当初から「全能の父」、天と地、見えるもの見えざるものすべての創造主を信じる、と宣言しています。この全能の神は全知にして遍在なさる神、もっと正確には、神は限りなく完全な霊にてましますので、同時に、全能、全知、遍在の神であるというべきでしょう。

何よりもまず、神は唯一にして聖三位一体の中に御自らに対して現存なさる御方です。また、神ご自身お造りになった宇宙の中に現存なさるが、それは、神の創造の御力によってなされたみわざの結果によるのであって、そこでは超越的本質そのものとして現存なさるのです。この現存は世界を超越し、世界に浸透し、世界の存在を保ちます。同様のことが、知識を通じての神の現存についても言えましょう。すなわち神は無限に力ある視線を投げかけるだけで、あらゆるものを看破し透徹なさるが、最後には特別な方法で人類の歴史、それは救いの歴史でもありますが、その人類の歴史の中に現存なさるのです。これは、言い方によればもっとも「パーソナル」な神の現存です。つまり、恩寵を通しての神の現存であって、人類はイエズス・キリストにおいて、満ちあふれるところからこの恩寵を受けたのです。（ヨハネ1・16～17）

「主よ、あなたは私を探り、私を知られる。」（詩篇38・1）

靈感を受けたこの詩篇の言葉を繰り返しつつ、世界各地にいるすべての神の民の構成員と一緒に、我らの創造主、父にして摂理であられる神の、全能、全知、遍在を信じる、と宣言しましょう。「私たちは神の中にいき、動き、存在するものです。」（使徒行録17・28）

### 神は三位一体である

教会は、唯一の神にして同時にえも言われぬ聖三位のペルソナ、御父と御子と聖霊にてまします神を信じると宣言します。教会はこの真理によって生きており、これは信仰の最も古い信条の中に含まれていますが、使徒聖ペトロと聖パウロの殉教1900年祭（1968年）を機に、パウロ六世が現代に呼び起された事柄です。それは「神の民のクレド」として、教皇の手で示され、世界中に知られている信条の中にあります。

唯一の神は「自らをわれわれに知らせることを望み、近づけない光の中に住んでいて、自分自身ですべての名にまさるものであり、あらゆる事物と創造されたあらゆる知性を越えるものである。（…）神のみが自らを父と子と聖霊として啓示することにより、この神的現実についての正しく十分な知識をわれわれに与えることができになり、われわれはこの神の永遠の生命にあずかれるよう、恩寵によって招かれている。この地上では信仰の暗さのうちに、死後には永遠の光のうちに。」

人知の働きをはるかに越えた御方である神は、ご自分を唯一の創造主、全能の父として示すばかりでなく、御父と御子と聖霊としてのご自身をも示そうとお望みになりました。この啓示の中には、愛である神の本質となる源が示されています。（唯一の神性の内的生命そのものにおいて神は愛） なのです。

この愛は、三つのペルソナ間のえも言われぬ交わり（コムニオ）として示されています。

神ご自身の本質的生命的秘義、最も深遠なこの秘義は、イエズス・キリストによって啓示されてきました。「御父のふところにまします神がこれを示された。」（ヨハネ1・18）聖マテオ福音書によると、キリストが、復活ののち地上での使命を終えるにあたり使徒たちにお与えになった最後の言葉はこれでした。「行け、諸国の民に教え、御父と御子と聖

霊の名によって洗礼を受けよ。」（マテオ28・19） この言葉によって教会の宣教は始まり、教会の本質にかかわる具体的な指示がされたのです。教会の最初の仕事とは、教えることと洗礼を受けること。ちなみに洗礼を受けるとは「水に浸す」という意味ですから、洗礼は水で授けます。この教理と洗礼によってすべての人が神の三位一体の生命にあずかるためでした。

### 新約における三位一体

イエズス・キリストは、かねてから神について教えてこられたこと、つまり御父と御子と聖霊のことをすべて、この最後の言葉に要約なさっています。主はイスラエルの伝統に従って、最初から、唯一の神に関する真理を告げ知らせておいでになりました。「すべての掟の中でどれが第一のものですか」と尋ねられたのに対して、「第一の掟はこれである、イスラエルよ聞け。われわれの主なる神は唯一の主である」とお答えになっています。（マルコ2・19） また、〈御自分の御父〉としての神にいつも話しかけ、「私と父とは一つである」と断言なさり、同じやり方で「父から出る真理の霊」のことも啓示されました。そしてその方のことを、「私が父からあなたたちに送る」御方と言って、私たちに保証なさったのです。（ヨハネ10・30、15・26）

〈御父と御子と聖霊のみ名によって〉という洗礼の際の言葉は、イエズスが地上での使命を終えられたとき使徒たちに託されたものですが、これを教会の秘跡的生命の基礎に置くことにより聖三位一体に関する真理を堅固にして来たため、この言葉は特別な意味を持ちました。すべてのキリスト者の信仰生活は、生ける神の秘義に浸るときに始まる洗礼を源としています。それは、使徒たち、特に聖パウロの数々の書簡が証言しているとおりで、書簡の中に含まれている三位一体形式の中で、一番よく知られ、また典礼にもしばしば用いられる一節は、コリント人への第二の手紙の次の箇所です。「主イエズス・キリストの恩寵、神（御父）の愛、聖霊の交わりが一同と共にあるように。」（コリント②13・13） その他、コリント人への第一の手紙やエフェソ人への手紙、また、聖ペトロの第一の手紙の第一章の冒頭（ペトロ①1・1～2）にもみられます。

間接的に、教会の祈りの生活は、聖霊のうちに、キリストを通して、御父に向かうという風に三位一体を知り、そして三位一体に向かう、という形で発展してきました。

こうして三位一体の神への信仰は、そもそもの始めから、教会とキリスト信者の生活の承伝の中に入っていたのです。従って、典礼全体は本質的に三位一体を信じてきましたし、現在も信じています。それは、神の御計画を表現するものであるからです。贖いを信じること、つまり、キリストの救いのみわざを信じることは、聖三位一体のこの崇高な秘義を理解するのに寄与してきました。それは、永遠の三位一体の深奥において「御父から」発出する御子と聖霊の派遣を明らかにするものであって、贖いと聖化の中に臨在する「三位一体の経綸」を啓示することによって明らかになるものです。聖三位一体は、まず始めに救済論を通して、つまり「救世の計画」を知ることによって、告げ知らされます。その救いの計画を、キリストが告げ知らせ、救い主の使命を実行なさる。さらにこれを知ることから、内在する三位一体、そして神の内的生命の秘義についての知識へと向う道が始まる

のです。

このような意味で、新約聖書には三位一体の啓示が満ち満ちているといえます。イエズス・キリストの中にご自身を啓示なさることによって、神は、一方で〈私たちにとって神とはどんな方であるか〉を啓示し、他方、〈御自身の中、すなわち神の内的生命の中では、神とはどのような御方であるのか〉を啓示なさいます。「神は愛である。」(ヨハネ①4・16) この真理はヨハネの第一の手紙に述べられていますが、ここではいわば、鍵となる真理です。この真理によって、私たちにとっての神とはどのような御方であるかが啓示されるとすれば、-人間の理性がそれを理解できるかぎり、そしてまた、人間の言語がそれを表現できるかぎりにおいて-神ご自身の中にあつて神とはどのような御方であるかもまた、啓示されていることとなります。神は御一体である、つまり、御父と御子と聖霊の交わりでもあるのです。

旧約聖書は、この真理をはっきりとは示していませんが、主の民との契約の中で神が父であることを示すことによって、また、上智と言葉と霊と共にこの世での主の活動を明らかにすることによって、真理に至るべき道を用意しています。(知恵7・22~30、格言8・22~30、詩篇32・4~6、イザヤ55・11、知恵12・1、イザヤ11・2、シラ48・12参照) 旧約聖書は、真っ先にイスラエルで、それからその外で、唯一の神に関する真理、一神教の要、を確立させました。ですからある意味で、聖三位一体の啓示を完全なものとしたのは新約聖書であること、また三位一体の真理は、そもそもの始めから洗礼と典礼によってキリスト教共同体の生きている信仰の根本にあつた、と結論しなければなりません。使徒たちの手紙にも、福音宣教の証言にも見出せる信仰の諸規定は、教会の教理教育と祈りに足並みをそろえてきました。

初期の頃、異端から身を守るために三位一体の教義が公式化されたのは確かですが、これは別問題です。三位一体の神についての真理は、信仰の最も深遠な秘義であり、もっとも理解しがたい秘義でもあります。従つて、誤った解釈をする可能性があります。とりわけキリスト教がギリシャ文化や哲学と接触するようになった時に。その一つの例が、三位一体の秘義を〈在るもの〉という用語で正確に表現する場合、私たちに啓示された神が唯一にして三位一体であると明確に定義した概念をその時代の哲学用語を使って正確に表現するような場合です。

この出来事は、ニケアとコンスタンチノーブルでの公会議の時でした。それらの公会議での教導職の成果が、ニケア・コンスタンチノーブル信経ですが、その頃から教会は、御父と御子と聖霊との三位一体の神を信じると表明しています。これらの公会議の業績を思い起すと、特に教会の教父たちの中に幾人かの目立って傑出した神学者たちがいることに言及しないわけにはいきません。ニケア以前の時代では、テルトゥリアヌス、チプリアヌス、オリゲネス、イレネウス、ニケア時代には、アタナシウスとシリアのエフレム、また、コンスタンチノーブル公会議のすぐ前の時代には大聖バシリウス、ナシアンスのグレゴリオおよびニッサのグレゴリオとヒラリウス、その後にはアムブロジウス、アウグスティヌスそして大聖レオが思い出されます。

5世紀からはいわゆるアタナシウス信経がありますが、これはクイクムクェ *Quicumque*

〈誰でも〉という言葉で始まる、ニケア・コンスタンチノーブル信経の解説です。

パウロ六世による「神の民のクレド」は初代教会の信仰を確認し、次のように宣言しています。「同一の神的実在である三つのペルソナを永遠に構成する相互の絆は、われわれが人間の尺度で測りうるすべてのものを無限に越える、聖なる三位の神の聖なるもっとも奥深い生命である」と。まことに、得も言われぬ唯一にして三位の神なのです。

※ 神について、他の沢山のカテケージスは省略されています。

たとえば 「神は信仰の源として御自身を啓示なさる」「人は信仰によって啓示された真理を受け入れる」「旧約における啓示の光」「キリストを絶えず証しする新約聖書」「不信と無神論の問題」「神の存在の証明について」「私たちの信仰の神」「神は御自分を存在するものとして啓示される」「科学者と神」「契約の神」「全人類の父なる神」「キリストは御父を啓示してくださる」「キリストは生ける神の御子である」「教会は御子への信仰を告白する」「道徳律と神の御旨」その他。